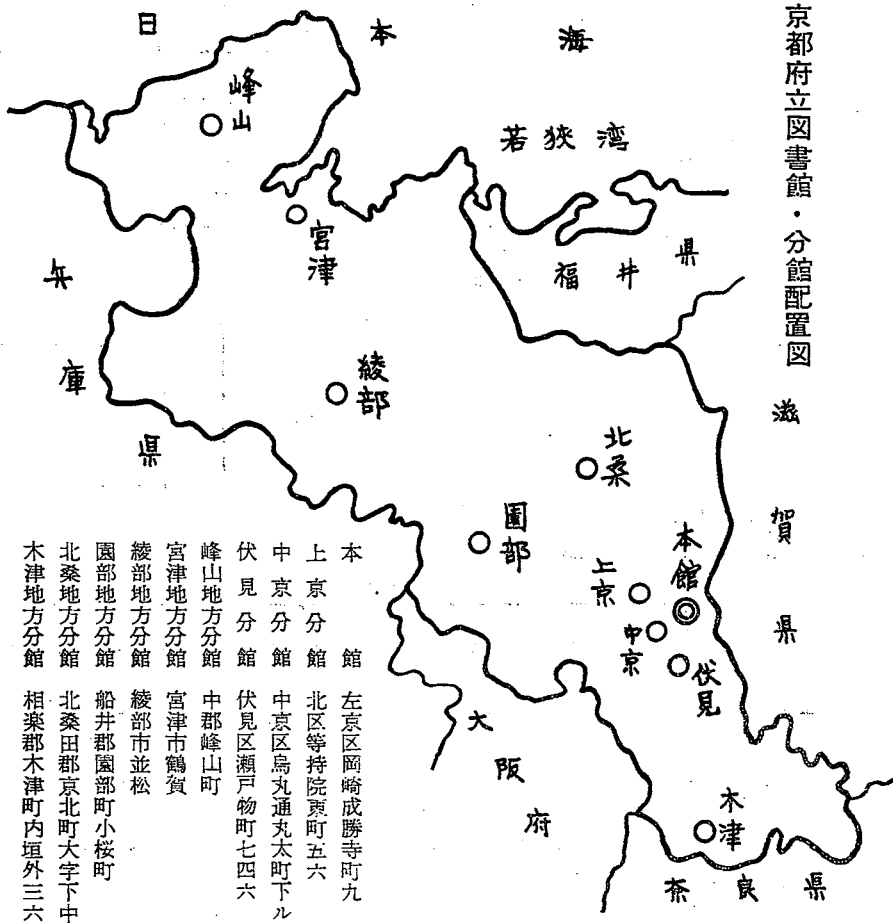


昭和 32 年度事業報告

(1957. 4. 1 ~ 1958. 3. 31)



京 都 府 立 図 書 館

京都市左京区岡崎成勝寺町 9 電・吉田(7)0069・2450

1 概 況

昭和32年度の岡崎本館利用者数は更に増加し、新記録をつくった。3・4月以外には常に館外にあふれる利用者の行列ができ、最もはなはだしい時には開館前から終日行列が絶えなかった程である。

このような利用希望者の増加に反して、現在の本館ははなはだ狭小で、かつ建築以来すでに半世紀を経て腐朽がいちじるしい。このため昭和31年3月6日、京都大学名誉教授新村出、京都博物館長神田喜一郎など8氏によって、京都府立図書館の新築移転に関する請願書（約25,000人の賛成署名簿を添付）が京都府会に提出され、文教委員会で慎重審議の結果、本会議において請願の趣旨を了として採択された。新しい構想にたつすぐれた図書館の実現は多数府民の待望するところであり、その方向に一步をしるしたものといえよう。

中京分館（旧河原町分館）の再開については、府民一般の強い要望があったが、さいわい6月より拡充再開することができた。

2 館内利用者（本館および市内3分館）

本館および市内3分館における本年度内利用者総数は約360,000人であった。

年度別に利用者数の動きを示すと次のとおりである。

年 度	利用者数(人)	1日平均(人)
昭和12年(戦前最高)	129,201	390
昭和29年	343,157	1,215
昭和30年	359,599	1,283
昭和31年	330,915	1,271
昭和32年	359,323	1,308

3 館外貸出冊数（地方6分館および貸出文庫）

地方6分館および貸出文庫において、各種団体に対し長期貸出（期間1ヵ月）を行つている。

なお、これらの長期貸出図書は1ヵ月の貸出期間中に各冊平均約3人の手を経て読まれるから、この分の本年度利用者総数は約255,000人と推定される。

年 度	冊 数(冊)
昭和29年	84,307
昭和30年	100,113
昭和31年	90,416
昭和32年	85,811

4 京都市内4館の利用者の内訳

	本 館	伏見分館	中京分館	上京分館	合 計
利用者数(人)	242,489	59,670	20,621	36,543	359,323
利用冊数(冊)	297,092	85,191	30,745	57,871	470,899
開館日数(日)	276	281	232	285	—
1日平均利用者数(人)	879	213	89	128	1,308
男 (%)	71	66	87	74	72
女 (%)	29	34	13	26	28
一 般 (%)	21	12	64	16	21
学 生 (%)	79	88	36	84	79

学生の類別は岡崎本館における調査では

大 学 生 31% 中 学 生 11% 各種学校 9%
高 校 生 38% 小 学 生 11%

となっている。

5 利用図書の内容

岡崎本館の利用冊数は約300,000冊で、一日平均1,076冊である。

これを図書の分類別にみると右のとおりである。

総 記	2.2(%)	自然科学	11.8(%)	語 学	5.8(%)
哲学・宗教	3.1	工 学	4.2	文 学	16.3
歴史・地理	8.7	産 業	1.5	児 童	18.9
社会科学	10.5	芸 術	3.1	新聞・雑誌	13.9

6 蔵書冊数

昭和32年度における当館の蔵書冊数は256,000冊をこえ、その配置別は右のとおりである。

本年度における増加図書数は10,014冊（購入＝8,355、受贈＝1,325、編入受入＝335、数量更正による減＝1）。

本館	219,256(冊)	峰山地方分館	4,292(冊)
伏見分館	6,316	宮津地方分館	4,242
中京分館	4,530	綾部地方分館	4,214
上京分館	5,296	園部地方分館	2,840
		北桑地方分館	2,865
		木津地方分館	2,805
		合計	256,656

亡失、き損、不用による除籍図書数は404冊であって差引年間9,610冊の純増である。

7 開架図書の利用状況

岡崎本館では大閲覧室および学生室の一部に開架書架を設けて、新刊書、基本図書、雑誌をおき児童室に完全開架制を行っている。開架図書の利用は非常に多く、本館における成人の利用冊数では約8割を占めている。

大閲覧室 約10,000冊 学生室 約3,000冊 児童室 約3,000冊

8 読書相談奉仕

図書館の資料が十分利用されるように、専任の係（係員2名）をおき、利用者の質問、相談に応じ実効をあげてきた。

最近特に、官公庁、会社、報道機関、文化団体、一般社会人が、

口頭	11,047件	電話	2,441件	郵便	144件
計	13,632件	開室日数	271日	1日平均	50.3件

実務の必要からこの業務を利用する傾向がよくなってきた。今後、京都府下の関係各機関とも連絡を密にして一層サービスしたい。なお、この係では相談事務のほか、特許庁発行諸公報の整備、展示会の開催、貴重図書、特殊資料の保管利用、文献目録の編集、図書館見学者の案内にも当たっている。

9 児童室

青少年のために、よい読書環境をつくることはきわめて大切である。当館は児童室の充実に絶えず力を注いでいる。

本年度の利用児童は32,643名（男57%、女43%）で、図書館附近の小学校の児童が多い。なお、利用児童が図書委員となって、児童室運営に協力している。

10 分館

(1) 伏見分館（昭和25年2月開設）

伏見地区は岡崎本館から約8kmはなれ、分館の必要性が大きい。

この分館は、はじめ他の建物の一部を借りて出発し昭和29年快適な新館舎の落成をまって移転再開した。敷地260坪、閲覧室70坪、座席120である。独立館舎をもった初の本格的分館（コミュニティー・ランチ）として、将来洛南地区文化センターの役割を果す日が期待される。

本年度の入館者数は、1日平均213名、1日最高390名であった。

(2) 中京分館（昭和24年6月開設）

この分館は当初、河原町通の丸善京都支店地下室を借用して7ヶ年間開かれ、多くの市民に親しまれていたが、昭和31年8月丸善支店のつぎうにより一時閉館した。その後適当な場所を探し求めた結果、烏丸丸太町下ル自治会館の3階（69坪）を借用することができ6月11日から再開した。

中京分館は新刊の小説・随筆・新聞・雑誌を中心に完全開架制をとり、気軽な市民の読書室となることを目標としている。なお中京分館の所在地は京都商工会議所に近く商工業者の利用を促進する目的をもって商工業関係の図書・雑誌・パンフレットの類の収集につとめている。

6月再開以来の利用状況は一般人が学生よりもはるかに多く、全体の64%を占めている。特に商工業者、サラリーマンの利用の増加してきたことはいちじるしい。

(3) 上京分館 (昭和26年4月開設)

京都市北部地区も岡崎本館から遠く、ここに上京分館が設置され活動して来た。

昭和31年4月、それまで借用していた紫郊会館から現在の北区等持院の故木島桜谷画伯元画室に移った。移転先は市電交叉点に近く、周囲は住宅地帯である。新館舎は約60坪で閲覧席80を有し、広い庭を前に控えて明るく快適である。資料も増し、名実共に旧に倍した充実ぶりである。

本年度入館者数1日平均203名、1日最高287名であった。

(4) 地方分館

昭和25年に峰山・宮津・綾部の3館、次いで昭和27年に園部・北桑・木津の3館が開設され現在6館である。これらの地方分館は、地域内の公民館、婦人会、青年会、読書会などの団体に対して30冊ないし50冊を期間1ヵ月で団体貸出するものである。

なお文部省国庫補助を得て、「青年学級文庫」を購入し、地方6分館および本館貸出文庫に配して「青年学級」の読書活動を援助している。

館名	利用団体数	利用冊数(冊)
峰山地方分館	452	17,598
宮津地方分館	437	12,657
綾部地方分館	228	10,982
園部地方分館	289	14,617
北桑地方分館	354	11,564
木津地方分館	481	13,792
合計	2,241	81,210

11 貸出文庫

本館内にあり、主として京都市内および近郊の団体に対する貸出を行っている。

本年度における利用団体数124、利用冊数4,601冊。

12 寄贈図書

弘文堂(東京都千代田区神田駿河台)から新刊書352冊。

13 経費

本年度諸経費は約18,098,000円で内訳は右のとおりである。

なお本年度末における館員数は主事22名、主事補23名、備人1名、臨時職員6名、計52名である。

費目	金額	比較
人件費	約12,781,000円	70.6(%)
図書館資料費	2,938,000円	16.3(%)
図書費	2,127,000円	11.8(%)
(定期刊行物)	811,000円	4.5(%)
その他の経費	2,379,000円	13.1(%)

数十万の資料をもつ

府立図書館が

あなたをお待ちします……

開館時間 午前9時～午後9時

休館日 月曜日・月末・国民の祝日